

第21回(平成27年度)
「水にかかわる生活意識調査」結果レポート
= 海外に誇れる日本の水文化、1位は「水道インフラ」=

ミツカン水の文化センター(事務局:東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル 株式会社Mizkan Holdings 東京ヘッドオフィス内)では、本年6月中旬に、東京圏、大阪圏、中京圏の在住者1,500名を対象に、平成27年度「水にかかわる生活意識調査」を実施し、このほど集計結果をまとめました。

今回は、「文化的観点からみた水」への意識を明らかにするために、「水と文化」に関する新たな設問を加えて調査を実施しました。

「水にかかわる生活意識調査」は、センター設立に先立ち、1995年に第1回目を実施して以来、ほぼ同じ内容で毎年6月に行っており、今回が21回目となります。日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化などについてアンケート形式で調べるという手法により、生活者の実感としての水の諸相を明らかにしようというものです。(調査データおよび数表データは、別途HPで紹介しています。)

《今回のトピックス》

【1】 海外に誇れる日本の水文化は？
…外国人に紹介したい水に関わる日本の文化は、「水道インフラ」が1位に

【2】 節水意識は低下の一途
…節水・再利用を行っている人が、半数割れ
2010年の61.8%から、この5年間で46.0%にまで低下

【3】 災害・防災への意識は？
…半数を超える人が、水災害への不安を“感じていない”
…一方で、ハザードマップの認知率は5割近くまで増加

【この件に関するお問い合わせ先】
ミツカン水の文化センター 事務局
〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル
株式会社Mizkan Holdings 東京ヘッドオフィス内
TEL.03-3555-2607 FAX.03-3297-8578 <http://www.mizu.gr.jp>

* 第1回(1995年)～第20回(2014年)「水にかかわる生活意識調査」の集計概要は、上記HPで紹介しています。

《結果の抜粋と掲載ページ》

■調査概要	2ページ
■水道水に関する意識／東京・大阪・中京圏	
【水道水への評価】	
◇水道水の評価は10点満点中7.46点	3ページ
◇飲用としての水道水の評価は10点満点中7.27点	3ページ
◇水道水への不満、全体のトップ3は「特に不満なし」「料金が高い」「おいしくない」 大阪圏は「水道料金が高い」が1位に	4ページ
【水道水の飲用実態】	
◇ふだん家庭で最も飲んでいる水は、一戸建てに住む人ほど「水道水」。	4ページ
◇ボトルドウォーターに求めるもの、半数以上が“味”を重視	4ページ
◇水道水の最も多い飲用方法、東京圏で「そのまま飲む」が増加、大阪は減少	5ページ
◇飲用方法別の水道水の評価は、「そのまま飲む」人が昨年に続き8.00点	5ページ
■水と災害／東京・大阪・中京圏	
◇水災害への不安、“感じていない”人が過半数 ……トピック【3】	6ページ
◇不安に感じている災害、トップ5のうち、3項目が水に関する災害	6ページ
◇最も不安に感じている災害は、「地震」が断然の1位	6ページ
◇災害時の水の備え、依然として約4割が“備えなし”	7ページ
◇ハザードマップの認知率が、5割近くまで増加 ……トピック【3】	7ページ
◇約4割が自分の住む地域のハザードマップの有無が「わからない」	8ページ
◇ハザードマップの活用率は15%程度	8ページ
■水と文化／東京・大阪・中京圏	
◇水と関わりの深い日本の文化、1位は「水道インフラ」	8ページ
◇外国人に紹介したい日本の水文化も、同じく「水道インフラ」 ……トピック【1】	9ページ
■日常の水意識／東京・大阪・中京圏	
◇節水している人が半数割れ／2010年の61.8%から15.8ポイント低下 ……トピック【2】	9ページ
◇節水や再利用の方法、5年前との比較で各項目の数値が低下	10ページ

【調査概要】

第21回(平成27年度)「水にかかわる生活意識調査」

- ◆調査対象数 : 1,500票
- ◆調査対象者 : 東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)、大阪圏(大阪、兵庫、京都)、中京圏(愛知、三重、岐阜)に居住する20歳代から60歳代の男女
- ◆調査方法 : インターネット調査
- ◆調査期間 : 平成27年6月4日(木)～6月9日(火)
- ◆回収数(人) :

	東京圏		大阪圏		中京圏		合計		小計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

水道水に関する意識／東京・大阪・中京圏

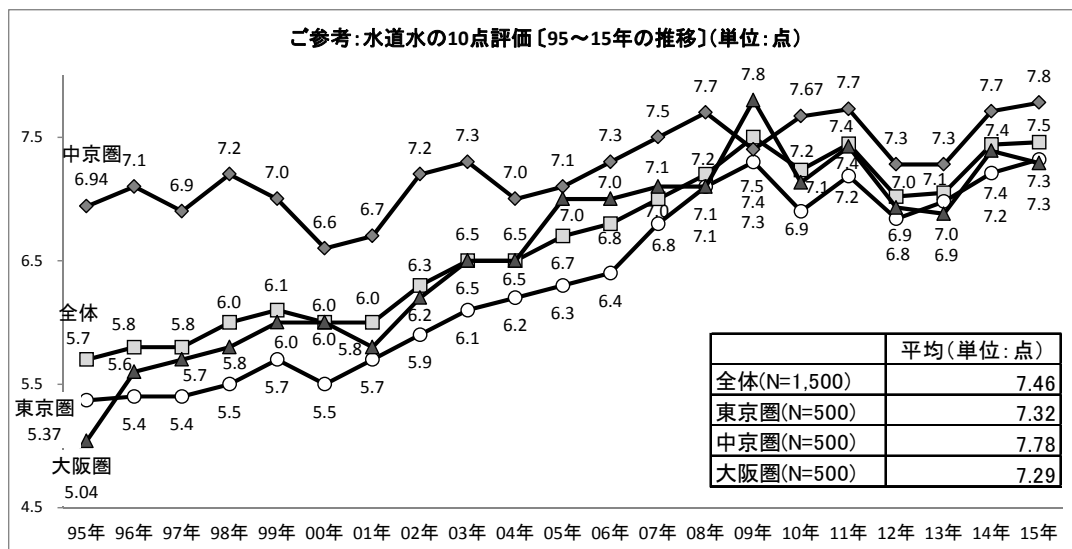
【水道水への評価】

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇全体の平均は7.46点

世界トップレベルの安全性を誇る日本の水道水。今回は、どう評価されたのでしょうか。

10点満点で聞いたところ、全体の平均は7.46点で昨年(7.44点)から微増も、ほぼ横ばいの評価でした。居住地別では、昨年と変わらず中京圏が7.78点でトップとなり、東京圏と大阪圏がそれぞれ7.32点、7.29点でした。



対象エリア：1995年…東京都、大阪府、愛知県、1996～2014年…東京圏(1都3県)、大阪圏(2府1県)、中京圏(3県)
有効回答数：1995～2009年…467～554、2010～2015年…1,500

Q.水道水を飲用水として10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

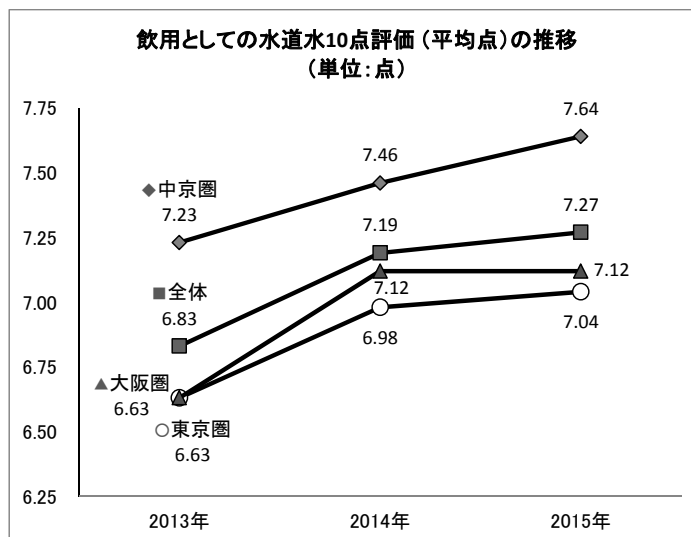
◇全体の平均は7.27点

次に、飲用目的に限定した場合の水水道水評価を前述の全般的な水道水評価と同様に10点満点で聞いたところ、全体の平均は、昨年(7.19)から微増(0.08ポイント増)の7.27点、居住地別のトップは中京圏(7.64点)と、傾向としては全般的な水道水評価と変わりませんでした。

昨年唯一6点台だった東京圏は今回7.04点で、初の7点台となりました。

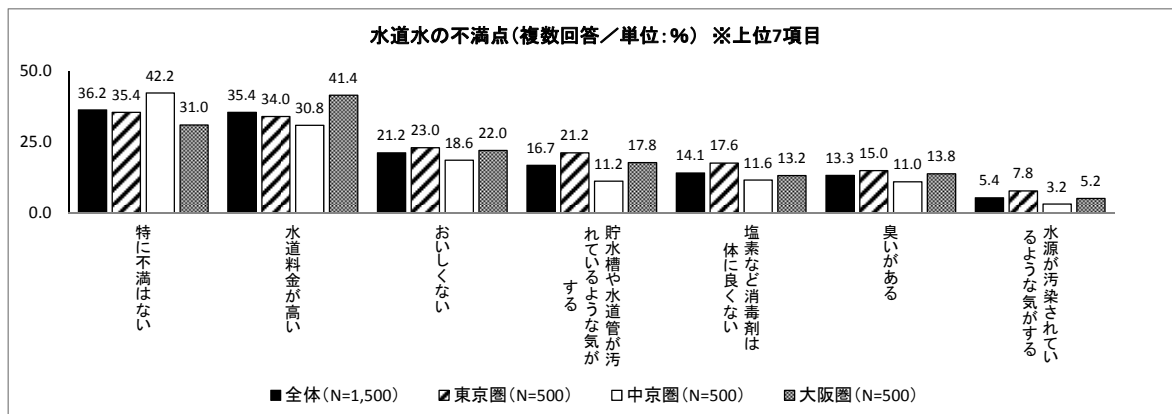
飲用としての水道水10点評価(平均点)

	平均(単位：点)
全体(N=1,500)	7.27
東京圏(N=500)	7.04
中京圏(N=500)	7.64
大阪圏(N=500)	7.12



Q.水道水について不満を感じていることは？（8択＋その他＋特に不満はない）

◇全体のトップ3は昨年同様、1位「特に不満はない」、2位「料金が高い」、3位「おいしくない」
 居住地別では大阪圏のみ「料金が高い」が1位に



「水道水に対する不満」を聞いたところ、全体のトップ3は、1位「特に不満はない」(36.2%)、2位「水道料金がが高い」(35.4%)、3位「おいしくない」(21.2%)と昨年と同じ結果でした。
 居住地別では、大阪圏では「水道料金が高い」(41.4%)の数値が昨年より5.6ポイント上昇し1位、「特に不満はない」(31.0%)が6.2ポイント減で2位と、順位が入れ替わりました。

【水道水の飲用実態】

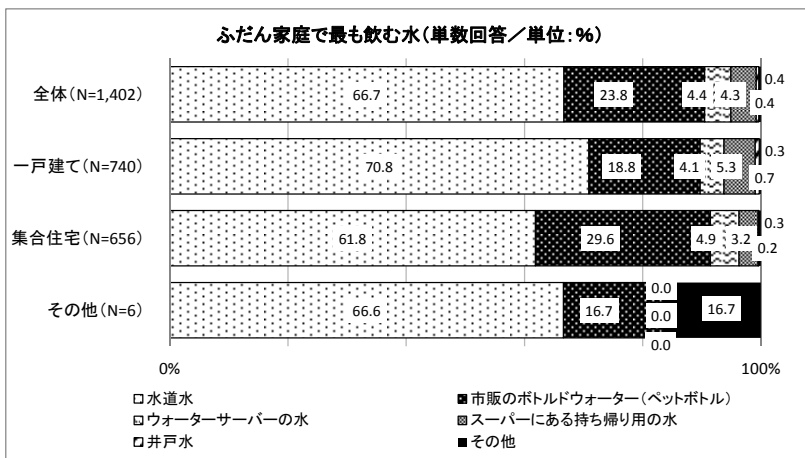
Q.ふだん家庭で最も飲んでいる水は？（5択＋その他）

Q.ボトルドウォーターを最も飲む理由は？（14択＋その他）

◇一戸建ての人ほど「水道水」を飲んでいる

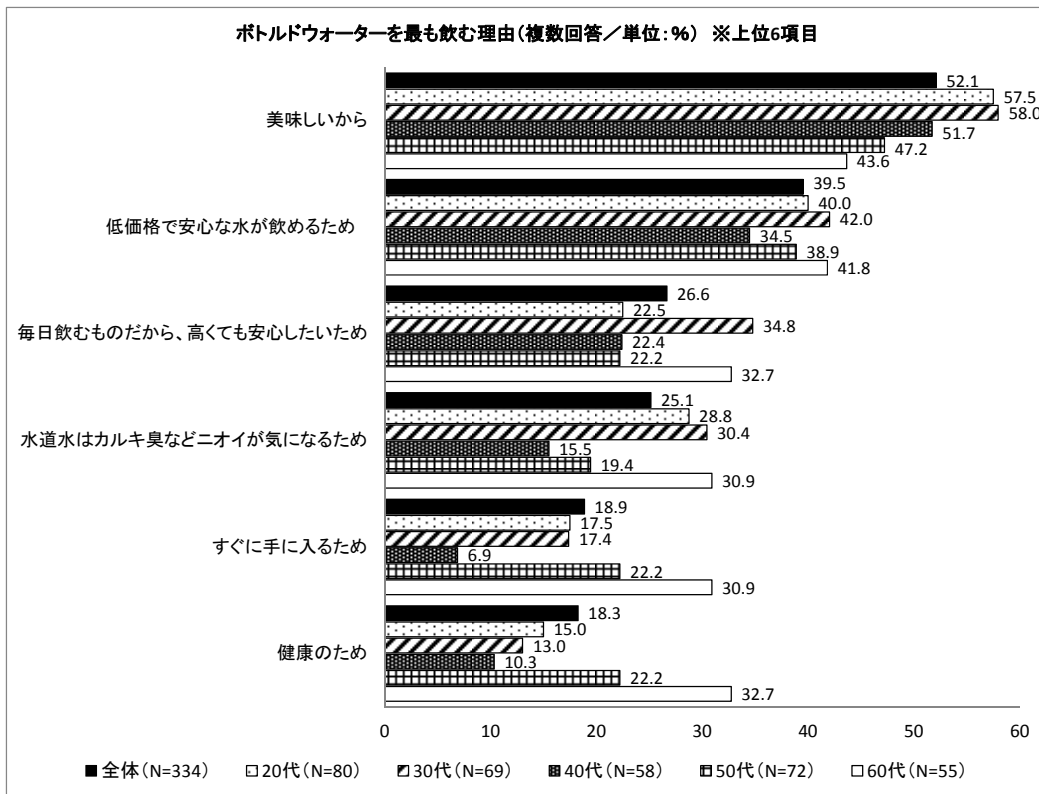
家庭ではどのような水が最も飲まれているのでしょうか？

結果は、1位「水道水」(66.7%)、2位「市販のボトルドウォーター」(23.8%)となり、以下、「ウォーターサーバーの水」(4.4%)、「スーパーにある持ち帰りの水」(4.3%)と続きました。
 住居形態別にみると、一戸建て、集合住宅ともに、1位は「水道水」(一戸建て70.8%、集合住宅61.8%)、2位「ボトルドウォーター」(一戸建て18.8%、集合住宅29.6%)でしたが、一戸建てでは「水道水」の数値が7割超だったのに対し、集合住宅は6割少々で、逆に「ボトルドウォーター」は、集合住宅が約3割なのに対し、一戸建てでは2割程度と、住まいの違いによる差異がありました。



◇家庭で最も飲む水2位「ボトルドウォーター」に求めるもの、半数以上が“味”を重視

次に、「家庭で最も飲む水」で「ボトルドウォーター」と回答した人を対象に、その理由を聞きました。
 結果は、1位「美味しいから」(52.1%)、2位「低価格で安心な水が飲めるから」(39.5%)、3位「高くても安心したいから」(26.6%)となり、多くの人が“味”や“価格の安さ”を重視する一方で、約4人に1人が値段に関わらず“安心”を求めていることがわかりました。

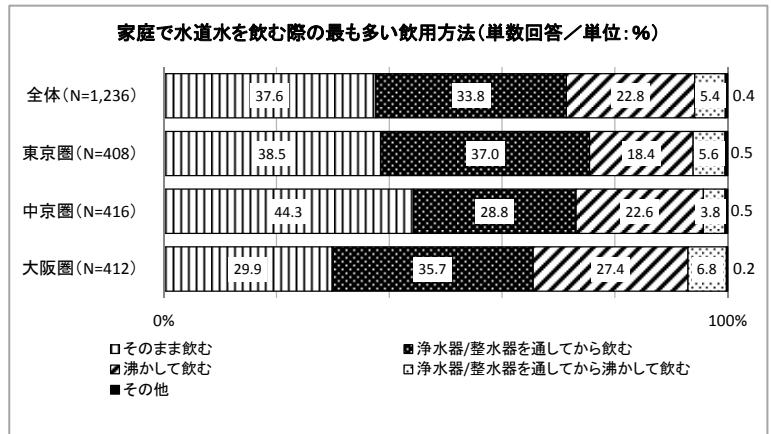


Q.家庭で水道水を飲む際の最も多い飲用方法は？ (4択+その他)

◇東京圏で「そのまま飲む」人が増加、大阪圏は減少

「家庭で水道水を飲む際の最も多い飲用方法」の結果は、1位「そのまま飲む」(37.6%)、2位「浄水器/整水器を通してから飲む」(33.8%)、3位「沸かして飲む」(22.8%)と、トップ3は昨年と同様で、数値の大きな変動もありませんでした。また、2位「浄水器/整水器を通してから飲む」以下、「その他」(0.4%)までの“何らかの手を加えて飲む人”(=“そのままでは飲まない人”)の割合は、昨年に続き6割超(62.4%)でした。

居住地別に「そのまま飲む」の割合をみると、東京圏は昨年から8.8ポイント増で38.5%、大阪圏は5.7ポイント減で29.9%と、違いがみられました。



◇「そのまま飲む」人の飲用としての水道水評価は、昨年に続き8.00点

飲用方法別の水道水10点評価(平均点)

	平均(単位:点)
全体(N=1,500)	7.27
そのまま飲む人(N=464)	8.00
手を加えて飲む人(N=772)	7.20
水道水は飲まない人(N=264)	6.17

3頁の「飲用としての水道水10点評価」を、上記の飲用方法別でみると、「そのまま飲む」人の平均は8.00点と、「全体」の平均(7.27点)を大きく上回る一方で、「水道水は飲まない」人の平均は6.17点と、「全体」の平均を1点以上下回りました。この結果は、昨年と同様の傾向です。

水と災害／東京・大阪・中京圏

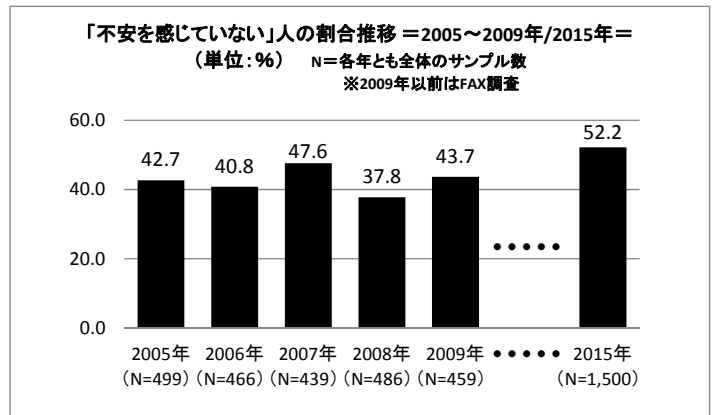
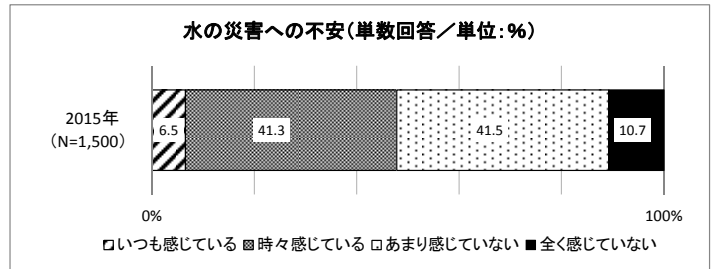
Q.水の災害への不安は？（4択）

◇「不安を感じていない」人が過半数

昨今の気象状況の変化を受け、水の災害への不安について、2009年以降の調査を実施しました。

その結果、「いつも感じている」(6.5%)、「時々感じている」(41.3%)、「あまり感じていない」(41.5%)、「全く感じていない」(10.7%)となり、「あまり感じていない」と「全く感じていない」の合計で、半数以上(52.2%)の人が、水の災害への「不安を感じていない」ことがわかりました。

“不安を感じていない”人に着目し、同様の調査を行っていた2009年以前の推移をみると、平均的に4割前後で推移しており、6年ぶりとなった今回の調査で、初めて5割を超える結果となりました。“不安を感じない”人の割合はこのまま増える傾向にあるのか、来年以降どう変化するのか、今後も注目していきたい調査項目です。



Q.不安に感じている災害は？（22択＋その他＋特に不安を感じたことはない）

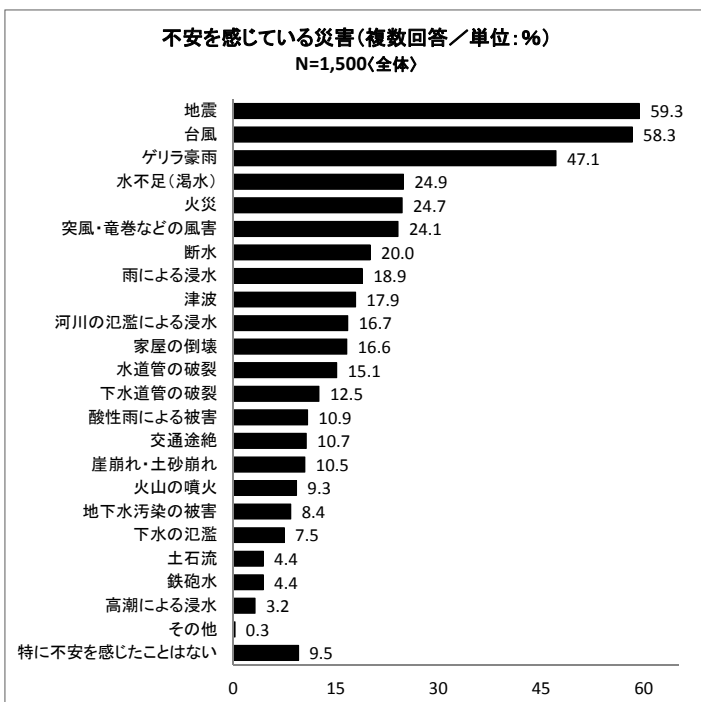
◇トップ5のうち、3項目が水に関する災害

◇最も不安に感じている災害は、「地震」が断然の1位

今回はじめて、水関連に限定せず、不安に感じている災害全般について聞いたところ、1位「地震」(59.3%)、2位「台風」(58.3%)、3位「ゲリラ豪雨」(47.1%)、4位「水不足」(24.9%)、5位「火災」(24.7%)となり、トップ5のうち3項目（「台風」「ゲリラ豪雨」「水不足」）を水に関する災害が占めました。

次に、「特に不安を感じたことはない」の回答者を除いて「最も不安に感じている災害」を聞いたところ、こちらは「地震」(49.2%)が、2位「台風」(14.8%)以下を大きく引き離して断然のトップとなり、多くの人の心に潜む地震への恐怖を垣間見ることができました。

居住地別でも、中京圏、大阪圏のトップ5は全体と同じでしたが、東京圏のみ、4位に「突風・竜巻など」(3.0%)、5位に「水不足」(2.8%)が入るなど、若干の違いがみられました。



	全体 (N=1357)	東京圏 (N=461)	中京圏 (N=441)	大阪圏 (N=455)
1位	地震	地震	地震	地震
	49.2	53.4	44.0	50.1
2位	台風	ゲリラ豪雨	台風	台風
	14.8	11.7	18.4	15.4
3位	ゲリラ豪雨	台風	ゲリラ豪雨	ゲリラ豪雨
	12.2	10.8	12.2	12.7
4位	津波	突風・竜巻など	津波	津波
	4.1	3.0	4.8	4.6
5位	河川の氾濫による浸水	水不足	河川の氾濫による浸水	河川の氾濫による浸水
	3.3	2.8	4.5	3.7

※東京圏の「水不足」「津波」は、同率5位

Q.災害時に対する水の備えは？（7択＋その他＋何もしていない）

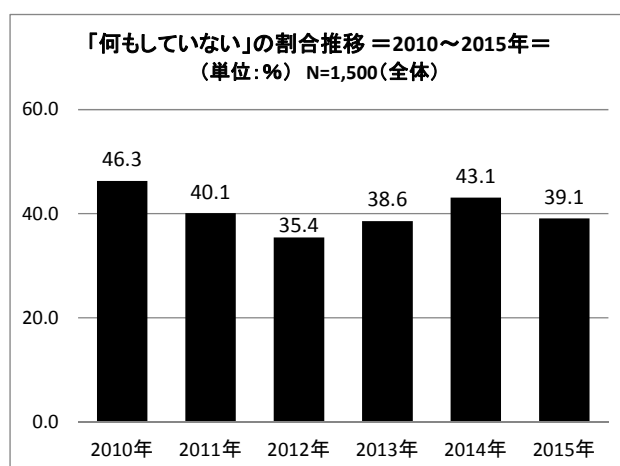
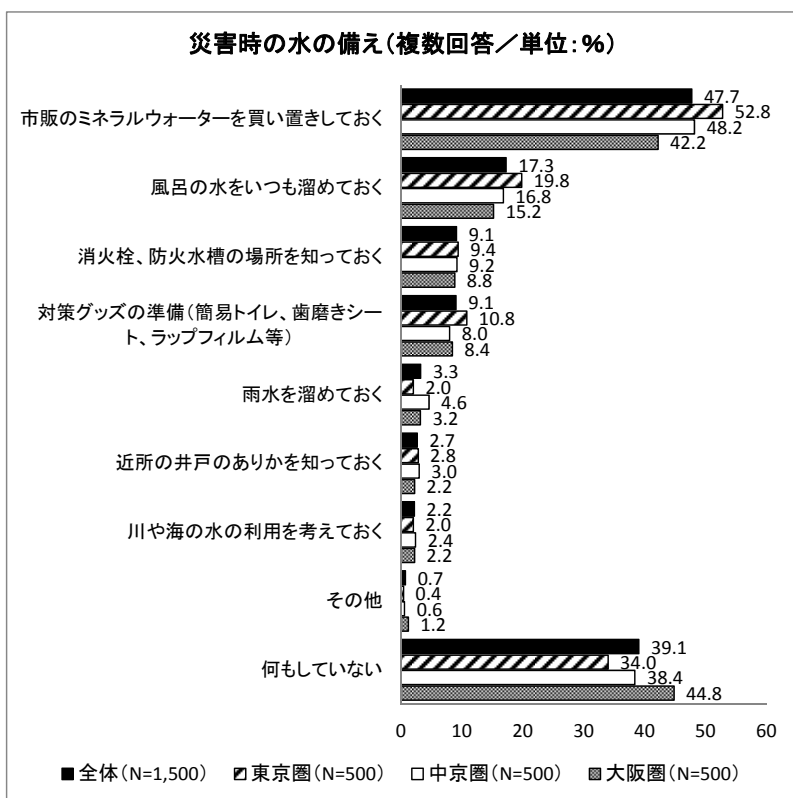
◇依然として約4割が、“備えなし”

東京圏の“ミネラルウォーター買い置き”は5割台に回復

「災害時に対する普段の水の備え」については、「ミネラルウォーターを買い置きしておく」が昨年より2.5ポイント増の47.7%でトップとなりました。昨年トップだった「何もしていない」は、昨年より4.0ポイント減の39.1%で2位でした。

居住地別では、東京圏で昨年4割超だった「何もしていない」人が34.0%に減少し、47.8%にまで落ち込んでいた「ミネラルウォーターの買い置き」が、52.8%と5割台に回復しました。

2010年以降で「何もしていない」人の割合推移をみると、2010年に5割近く(46.3%)あった数値が、東日本大震災を機に、2011年(40.1%)、2012年(35.4%)と減少し、その後、2013年(38.6%)、2014年(43.1%)は増加に転じるといった変化はあるものの、全体的には震災の有無にかかわらず、常に4割前後の人が「何もしていない」という傾向がみられます。



Q.ハザードマップの認知は？（3択）

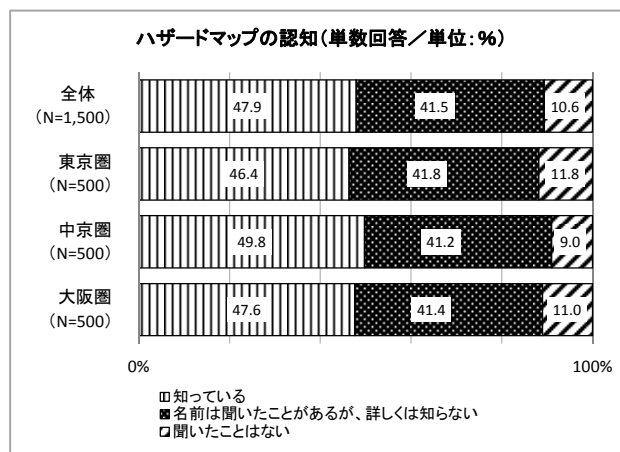
Q.居住地域のハザードマップの有無は？（3択）

Q.ハザードマップの活用状況は？（4択）

◇内容も含めた認知率が、5割近くまで増加

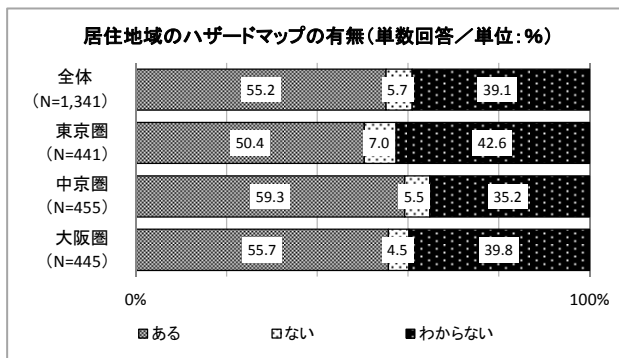
昨年4割に満たなかったハザードマップの認知率(昨年39.3%)。今回は、内容も含め「知っている」人が47.9%と5割近くまで増加し、「名前は聞いたことがある」が41.5%(昨年比5.2ポイント減)、「知らない」人は10.6%(昨年比3.4ポイント減)でした。

なお、居住地別の数値に、大きな違いは見られませんでした。



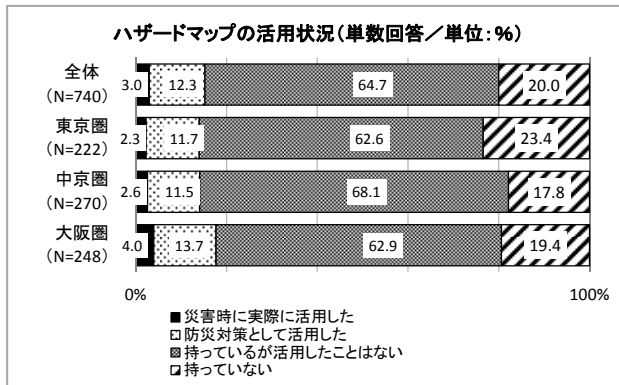
◇依然として約4割が、自分の住む地域のハザードマップの有無が「わからない」

前問のハザードマップを「聞いたことはない」人を除いて、居住地域のハザードマップの有無について聞いたところ、「ある」が昨年から5.9ポイント増の55.2%、「わからない」が3.8ポイント減の39.1%となりました。数値は下がったものの、依然として約4割が、自分が住んでいる地域にハザードマップがあるかどうか「わからない」人ということになります。



◇実際の災害時も含めた活用率は15%程度

前問で居住地域にハザードマップが「ある」と回答した人を対象に聞いたハザードマップの活用状況は、「災害時に実際に活用した」が3.0%、「訓練時に防災対策として活用した」が12.3%で、これらを合計した活用率は15.3%でした。認知率は約5割のハザードマップですが、その活用率は、まだまだ充分とは言えないようです。



水と文化／東京・大阪・中京圏

昨今、日本を訪れる外国人観光客が増加しており、2020年の東京オリンピックに向け、この流れはさらに加速することが予想されます。そこで、迎える側である日本人の自国文化に対する意識を探る一環として、外国人に紹介したい“日本の水文化”について、今回初めて聞いてみました。

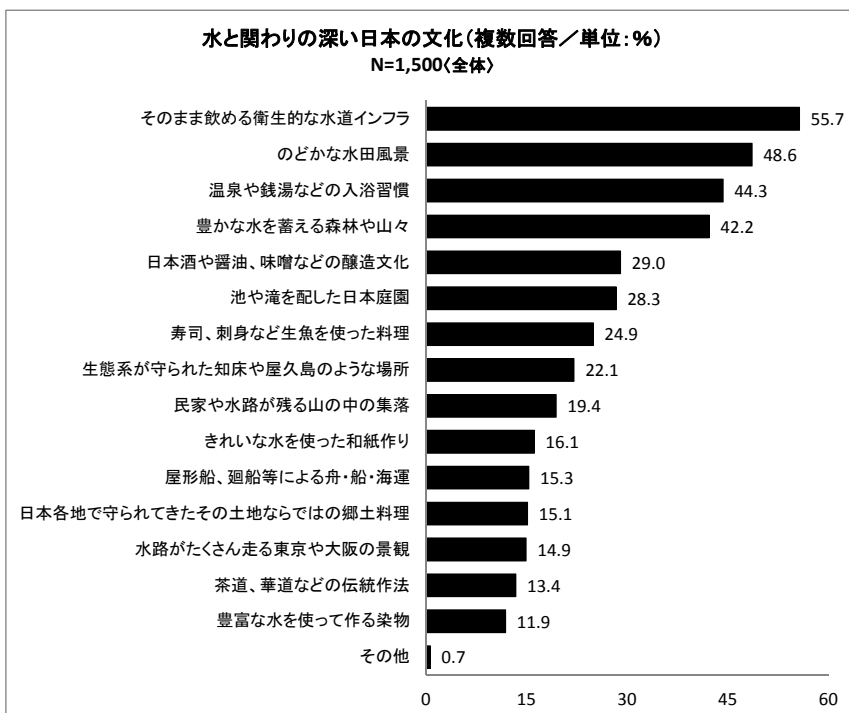
Q.水と関わりの深い日本の文化は？ (15択+その他)

Q.外国人に紹介したい「水と関わりの深い日本の文化」は？ (15択+その他)

◇1位は「そのまま飲める水道インフラ」

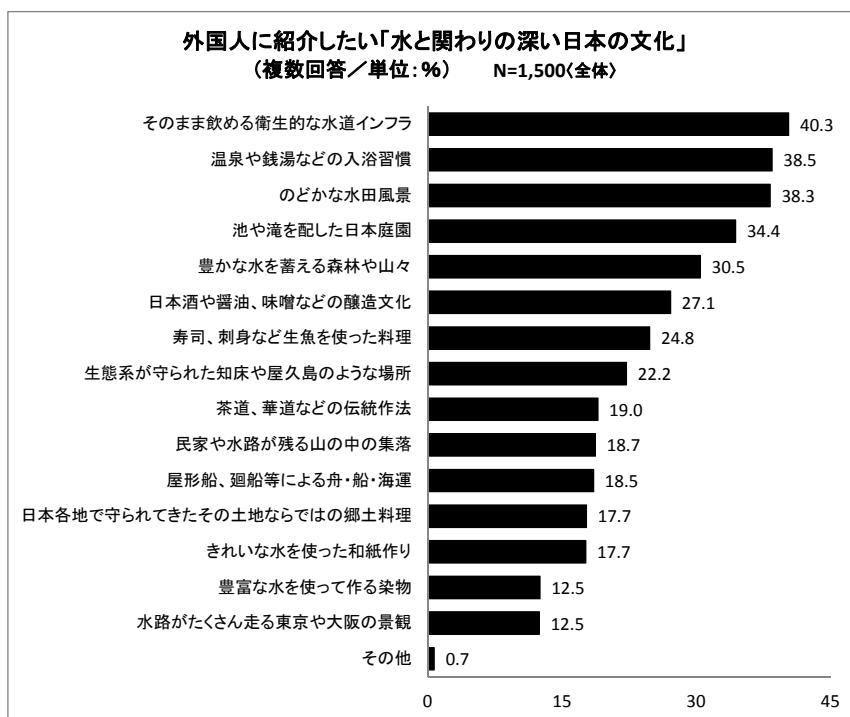
“日本の水文化”としてイメージするものは何でしょう？

まず、「水と関わりの深い日本の文化」について、選択肢を提示して聞いたところ、1位は「そのまま飲める衛生的な水道インフラ」(55.7%)、2位「のどかな水田風景」(48.6%)、3位「温泉や銭湯などの入浴習慣」(44.3%)と続きました。なお、「水道インフラ」は、性別、年代別、居住地別のすべてでトップでした。



◇外国人に紹介したい水文化も、同じく「水道インフラ」が1位

次に、同様の選択肢で「外国人に紹介したい水と関わりの深い日本の文化」を聞いてみると、こちらも「水道インフラ」(40.3%)がトップとなり、2位「入浴習慣」(38.5%)、3位「水田風景」(38.3%)でした。多くの人が自然や伝統ある水文化というより、「そのまま飲める衛生的な水道インフラ」といった日本の技術力を、海外に対して誇れるものとして捉えているようです。



日常の水意識／東京・大阪・中京圏

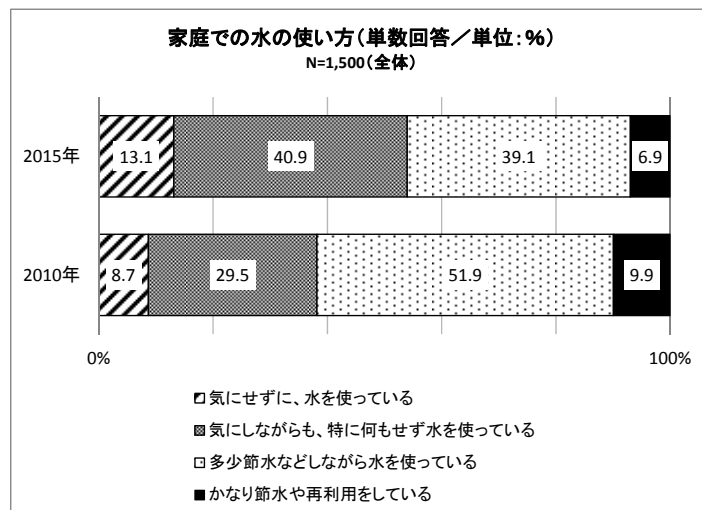
Q.水の使い方は？ (4択)

◇節水している人が半数割れ

5年前との比較で、15.8ポイント低下

「家庭における水の使い方」は、ここ数年、節水を行っている人の割合が低下の一途をたどっています。今回も、「かなり節水や再利用をしている」人が昨年から2.7ポイント減の6.9%、「多少節水や再利用をしている」人が3.0ポイント減の39.1%で、この両者を合計した「節水を行っている人」は46.0%と半数を割り込み、節水意識の低下は止まりませんでした。

近年の節水意識の低下度合いを測る目安として、5年前(2010年)と今年の結果を比較したところ、2010年は「かなり節水や再利用をしている」人が9.9%、「多少節水や再利用をしている」人が51.9%、両者を合計した「節水を行っている人」は61.8%となり、この5年間で15.8ポイント低下しました。



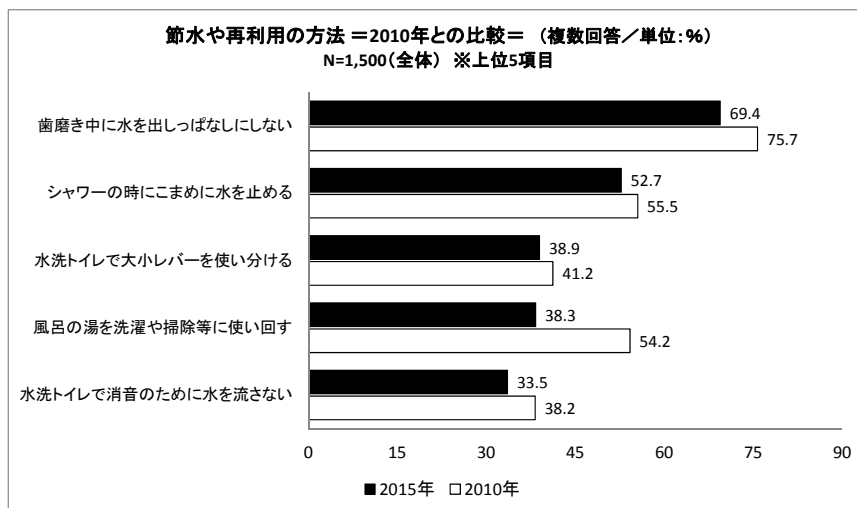
Q 節水や再利用の方法は？（12択＋その他＋特にやっていない）

◇トップ3は、1位「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」、2位「シャワーの時にこまめに水を止める」
3位「水洗トイレの大小レバーを使い分ける」
5年前との比較で上位の項目は同様も、各項目の数値が低下

「節水や再利用の方法」について聞いたところ、トップ3は、1位「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」（69.4%）、2位「シャワーの時にこまめに水を止める」（52.7%）、3位「水洗トイレの大小レバーを使い分ける」（38.9%）となり、4位「風呂の湯を洗濯や掃除に使い回す」（38.3%）、5位「水洗トイレで消音のために水を流さない」（33.5%）と続きました。

今回の結果を2010年と比較したところ、2010年は1位「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」（75.7%）、2位「シャワーの時にこまめに水を止める」（55.5%）、3位「風呂の湯を洗濯や掃除に使い回す」（54.2%）、4位「水洗トイレの大小レバーを使い分ける」（41.2%）、5位「水洗トイレで消音のために水を流さない」（38.2%）と、トップ5は順位こそ異なるものの、すべて同じ項目でした。しかし、各項目の数値に目を向けると、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」は6.3ポイント差、「風呂の湯を洗濯や掃除に使い回す」では15.9ポイント差など、いずれも2015年の数値が2009年を下回りました。

近年の節水意識の低下とともに、節水方法の種類（節水の取り組み率）も減少してしまっているといえそうです。



参考 「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

ミツカングループは1804年(文化元年)の創業以来、食酢の醸造を社業の中心としてきました。食酢の醸造に水は欠かせないものであり、ミツカングループは水の恩恵を受け、水によって育てられてきたといっても過言ではありません。それだけに、ミツカングループの水に対する関心は創業当時から一貫して高いものでありました。

1999年1月に、「水の文化」に関するさまざまな研究や情報交流活動を推進していく母体として「ミツカン水の文化センター」を設立。センターを活動拠点に研究活動、機関誌「水の文化」の年3回の発行、ホームページでの情報提供、「使いながら守る水循環」を学ぶ市民参加型ワークショップ「里川文化塾」の実施など、様々な活動を行っています。「水にかかわる生活意識調査」も「ミツカン水の文化センター」の活動の一環として実施しているもので、研究事業の、そして一般生活者の啓発活動の基礎資料として有効活用していきます。